

Title	<書評> Bertrand Saint-Sernin, "WHITEHEAD Un Univers en Essai", Vrin, Paris. 2000.
Author(s)	森, 元斎
Citation	年報人間科学. 29-1 P.211-P.216
Issue Date	2008
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/6293
DOI	10.18910/6293
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Bertrand Saint-Sernin,
WHITEHEAD Un Univers en Essai,
Vrin, Paris. 2000.

森 元 斎

・フランスにおけるホワイトヘッドとベルトランド・サン・セルナンについて

本書について述べる前に、日本でも手に入りやすい文献のうちで、近年のフランス語圏のホワイトヘッド受容について概括してみよう。一九九四年にI・ステンゲルス（彼女はフランマンなのでステンゲルスと読む）の編著による *L'effet Whitehead*, Vrin、二〇〇〇年に本書があり、二〇〇四年にD・デュベスによる *Un empirisme spéculatif, Lecture de Procès et réalité de Whitehead*, Vrin、二〇〇六年にB・ティメルマンの編著による *Perspective, Leibniz, Whitehead, Deleuze, Vrin*、同年にM・L・ラレイモンディによる *Une philosophie pour la physique quantique, Hamattan*、それぞれ刊行されている。これらの著作は、スタンジュールやデュベス、ティメルマンなどのドゥルーズ的読解、本書のサン・セルナンやラレイモンディなどのエピステモロジー的読解に大別できる。ドゥルーズ的読解の文脈においては、ドゥルーズ本人が『差異と反復』や『巽』、『シネマ』の元になる講義でホワイトヘッドを取り上げたことから、彼らはドゥルーズにおけるホワイトヘッドの受容を論じ、ドゥルーズ哲学やベルクソン、パースなど、いわゆる現代思想とホワイトヘッドとを比較研究している。そしてエピステモロジー的読解の文脈においては、哲学者でありながらなんらかの科学的業績（たとえばサン・セルナンならば科学史、ラレイモンディならば物理学、彼の著作の序文を書

いているA・F・ラルジョーならば生物学)を残している者がホワイトヘッドを考察している。いかなるホワイトヘッド読解が正当であるのかという問いは、もちろん書き手の作品は手を離れた途端、読み手の自由となるので、診断を下すことは出来ない。しかしながら、ホワイトヘッドの軌跡を辿ると、彼は、初期にラッセルとの共著である記号論理学の金字塔『プリンキピア・マテマティカ』をはじめとした数学や論理学の基礎論的論文を描き、中期にアインシュタインのどに刺さった棘ともいわれる『相対性原理』などの自然科学に関する書物を刊行し、後期には科学史の白眉ともいわれる『科学と近代世界』や、形而上学の哲学書『過程と実在』を残している。こういったホワイトヘッドの業績を考えるならば、サン・セルナンのエピステモロジー的読解が類例をみないほどのを得ているのは確かであろう。なぜなら、私は未見ではあるが、近年では科学史の著作を残し(二〇〇〇年にD・アンドレーとA・F・ラルジョーとの共著『*Philosophie des sciences*, Gallimard)」、その他多くの科学哲学に関する仕事(確率論のクールノに関する著作や、初期では数学に関する著作など)を著しているサン・セルナンの探究は、広大な科学史の知見をバックボーンに備えているので、ホワイトヘッド読解に十分に一石を投じるものである。

・サン・セルナンの読解方法とその内容

そこで、サン・セルナンのホワイトヘッド読解の方法に耳を傾け

てみよう。彼は、ホワイトヘッドの哲学において諸科学へと導くであろう位置付けを検証するためには、二つの道があるという。ひとつは、諸々のホワイトヘッドの著作を「時間的順序に従って構成していく」(p.172) ことであり、もう一方は、「諸科学によって彼(ホワイトヘッド)の哲学を再構築する」(ibid) ことである。前者の道においては、多くの注釈者たちは「ホワイトヘッドが研究した個別的な諸科学を位置付けて」(ibid) おらず、後者の道を取ることで、「一九二九年の著作『過程と実在』におけるホワイトヘッドの諸科学の哲学の鍵を見出す」(ibid) と述べている。また「先行する著作において見出されてきた、より正確でより豊かな展開をわれわれは参照できる」(ibid) とも言っている。つまり、前者の仕方のような「時間順序に従って構成している」読解の多くは、ただホワイトヘッドそのものを時系列的に追うだけで、ホワイトヘッドの哲学を再構築するような展開はなされていない。しかし、後者の仕方のようなホワイトヘッドが言及していた諸々の科学にも読解の眼を差し向けることによって、ホワイトヘッドが言わんとしていたことを正確に理解しようと努めるのだ。サン・セルナンは、後者の仕方、デカルトやニュートン、または一九二九年より前の宇宙論などを導入し、読解を進めていく。

章立ては、一章が「肖像」と題され、ホワイトヘッドの生涯を素描する。人物像を明確にすることによって、ホワイトヘッドの思想の入門としても適していると言えるだろう。第二章は「思弁的实践」、第三章は「諸カテゴリー」、第四章は「実在と形式」と題されており、

これらは、ホワイトヘッド哲学に関する諸々の方法論をまとめたものである。五章の「延長的連続体」、六章の「自然の秩序」、七章の「諸科学と有機体の哲学」、八章の「ホワイトヘッドの現在性」において、ホワイトヘッドの哲学に対する、サン・セルナン独特とも言える科学的な知見を踏まえた豊かな読解が展開されている。

・ニュートンとデカルトとの対決

とりわけ、ホワイトヘッドの中期の主要概念である「出来事」(event)と後期の主要概念である「アクチュアル・エンティティ」(actual entity)や「アクチュアル・オカージョン」(actual occasion)との差異を、デカルトやニュートンに則して読み進める五章の「延長的連続体」は、中期と後期との連続性や非連続性を考える上で重要であろう。

サン・セルナンは「われわれは、運動、運動しつつある物体、変化といった諸々の考えを定式化する何らかの条件付けを探求するべきである」(p.116)と述べ、「アクチュアル・オカージョンとアクチュアル・エンティティはニュートンの絶対空間の性質を持っているのであり、運動しつつある物体は、アクチュアル・オカージョンではない。それらは、アクチュアル・オカージョンのある種の結合体ではある。運動しつつある物体は「出来事」なのだ。「運動」や「運動しつつある物体」といった考えは直観的ではなく、定義された状態を必要とする」(p.117)と言う。どういうことであろうか。

「運動」とは、ニュートンの空間のうちで、物体が運動していることを観察することによって、事後構成的に理解しうることであり、存在や物体といった固定された事物や事象という「もの」になる。しかし「運動しつつある物体」は、今まさに動いており、固定化は「運動」よりも困難であり、いわば事態やアクシデントといった「こと」になる。流動しているものを切り取った瞬間＝瞬時が「アクチュアル・エンティティ」であり、「出来事」は「今……: 最中」といった事態なのだ。更に、サン・セルナンはホワイトヘッドの以下の言葉を引用する。「「変化」の考えの基本的な意味は、「アクチュアル・エンティティ」がいくつかの決定された出来事から成り立つことのあるあいだの差異」なのである」(PR, p. 73)。つまり、「運動しつつある物体」という「出来事」が「アクチュアル・エンティティ」という事後構成的に理解しうるものへと時間的に移行し、「変化」が起こる。それが「差異」だというのである。

このように「差異」を明確にすることによって、ホワイトヘッドは中期では自然を、「出来事」という究極的事物として考察していたのだが、後期では、自然という場所、つまり「延長的連続体」を「アクチュアル・エンティティ」や「アクチュアル・オカージョン」という究極的事物として捉えていた。こういった術語の変遷を辿ることによって、「われわれが自然の秩序について考えるときにこうした術語に関して考えることがホワイトヘッドを明確にする」(p.117)とサン・セルナンは言う。科学認識論の立場でホワイトヘッドに則して自然を論じる際に、このような「出来事」や「アクチュ

アル・エンティティー（アクチュアル・オケージョン）」といった究極的な事物に関する語彙について、サン・セルナンが明確にしていくことは、ホワイトヘッド哲学における中期と後期（「自然」と「延長的連続体」との差異など）の連続性や非連続性を考える上で重要である。

「有機体の哲学はニュートンの見解よりもデカルトの見解により近い」（PR,p.73）というホワイトヘッドの言葉を受けて、サン・セルナンは「二つの種類の実体、つまり物体的実体と精神的実体との悲惨な分類」（PR,p.73）以前のデカルト哲学を再び考えることが問題となる」（p.118）と述べる。ホワイトヘッドは、事物や存在における精神的なものと物的なものとが不可分であることの原型を「悲惨な分類以前の」デカルトに見出すのである。そもそも「延長的連続体」の考えは、その名の通り、デカルトの「延長」に由来しているのは自明のことであり、「アクチュアル・エンティティー」はデカルトの「真なる事物」（*res vera*）だとホワイトヘッドは言い切っている。こういったデカルトの影響に加え、「延長的連続体」は、マクスウェルの電磁場に関する理論を経験したホワイトヘッドにとって、空間でありながらも事物でもある。つまりそれは、「アクチュアル・エンティティー（アクチュアル・オケージョン）」や「出来事」などの時間的に移行するものによって構成され、それらのもので満ちた「場所」（*field, locus, place*）なのだ。時間的な事物が存在するからこそ、その空間が電磁気的な場を構成し、時間的でありながらも空間的であり、空間的でありながらも時間的であるの

だ。そういった意味でホワイトヘッドは「時空連続体」という語も用いる。しかし、デカルトと異なるのは、計量可能な「延長」といったものはなく、ホワイトヘッドにおいて事物だけが計量可能であり、「延長的連続体」は無限に広がっているので、計量は不可能であるということである。つまりデカルトは計量可能な幾何学のみで実在するものを考えていたのであるが、ホワイトヘッドは計量可能性と計量不可能性とを共に含み持ち、幾何学のみではなく分割可能な持続としての物理的現象や実在するものを捉えていたのだ。

「アクチュアル・エンティティー」や「アクチュアル・オケージョン」などの事物は、「宇宙の多様な構造の理由において、運よく、たとえ高密度で一様であったとしても、その関係のネットワークは繋がるようなことはなく、関係のネットワークは解きほぐされ分解されることが不可能である。つまり、因果的に独立した諸出来事は切り離されることが不可能なのだ」（p.106）。事物は「存在」である以上、流動する実在性を切り取った切断面であり、確固としたものであり、各々が同時的には存在しない。サン・セルナンは、いわゆる「同時性」といったものはなく、それぞれが唯一無二のかけがえないものであると説明する。たとえ諸々の構成物で事物が成り立っていても、その事物は分離などしないのである。こういった事物や存在、つまり「アクチュアル・エンティティー（アクチュアル・オケージョン）」は、「運動」によって事後構成的に語ることでできるニュートンの物質観なのであり、確固とした存在である。さらにはサン・セルナンが考えているホワイトヘッドの「アクチュアル・

エンティティ（アクチュアル・オケージョン）」は、計量可能な物質であり、精神も物体も不可分であるという「悲惨な分類以前」のデカルトの実体観でもあるのだ。また「延長」の概念の受容として、ホワイトヘッドをデカルトの継承者であると右のように考えることによって、ホワイトヘッドは、ニュートンやデカルトの見解に近く、その中でもデカルトにより近いとサン・セルナンは論じる。「ニュートンはデカルトよりも二世紀にわたって、むしろそれ以上に科学の秩序において優位を占めていた。しかしながら、「ホワイトヘッドの」「思弁的構図」においては、こういった流行を理解し、廃れた科学となっているものの向こう側へと提唱者の真実を見守っているのである」（p.125）。

以上のように、サン・セルナンは、科学史上の、とくにデカルトやニュートンについてのホワイトヘッドの受容を論じ、またその他にも多くの科学史上の出来事について念頭に置きながら（ローレンツ変換による同時性やアインシュタインの相対性理論、一九二九年以前の宇宙論、とくに一九二二年のフリードマン・モデルやビッグバン理論について）、論考を進めていく。先にも述べたように、彼のエピステモロジー的読解は、近年のフランス語圏におけるホワイトヘッド研究の中でも、重要であることは間違いないだろう。

・本書への批判的考察

しかしながら、サン・セルナンの読解において、哲学史に関する

記述は決して多くない。確かにホワイトヘッドは自然科学に関するさまざまな論文を残している。しかし同時に、『過程と実在』において哲学史に多くを割いているように、諸々の哲学者からの思想の受容というものが数多く認められることも忘れてはならない。ホワイトヘッドは、初期から中期を経て後期まで程度の差はあれ、デカルト、ライプニッツ、ロック、バークリー、ヒューム、カントなどを、しばしば引用している。彼はとりわけ一貫してライプニッツに関しては親近性や相違などを述べている。

たとえば、デカルトが幾何学に基盤を置いていたのに対して、ライプニッツは力学に基盤を置いた上で、幾何学上の究極的実在を点ではなく線に求めていた。ホワイトヘッドもまた、計量可能な幾何学をも確かに存在論において考慮に入れていたのだが、力学についても考え、究極的実在を点ではなく線に求めていた。そこで、両者の視点がいかにしてホワイトヘッドに受容されているのかを論じることは重要であろう。つまりデカルトの思考とそれを批判したライプニッツの受容という観点でホワイトヘッドを再構築することが必要なのだ。

また、ホワイトヘッドは自らの提唱している有機体の哲学について『科学と近代世界』の中で、こう述べている。「もちろん、哲学の基礎を有機体という前提に置くことはライプニッツに遡らなければならぬ」（SMW, p.155）。ライプニッツについてホワイトヘッドは、「デカルトが、その後の哲学を科学運動とある程度つねに接近させた思想の伝統を導きいれたと同様に、ライプニッツは、究極的

な現実的事物である存在は、ある意味において有機体化の過程である、というもう一つの伝統を導き入れた」(SMW,p.156)とも言うている。

その上で、「アクチュアル・エンティティー(アクチュアル・オケージョン)」や「出来事」における「モノド」の受容に関して『科学と近代世界』の後に書かれた文章である『過程と実在』の中でこう説明している。「これはモノド論である。しかしライブニッツと異なるのは、彼のモノドは変化することのうちにある。有機体の理論において、モノドは生成するだけだ。各々のモノド的被造物は世界を「感受」(feeling)する過程の一つの様態であり、複雑な感受の一つの単位において、それぞれ決定的な仕方の世界に住まう過程の様態でもある。このような単位が「アクチュアル・オケージョン」であり、創造的過程から派生した究極的被造物なのだ」(PR,p.80)とホワイトヘッドは「モノド」を批判的に取り入れている。こうしたライブニッツに関する考察はホワイトヘッドのテキストの中から数多く見出され、影響は計り知れない。ライブニッツの諸概念のホワイトヘッドにおける受容をわれわれが考えることは、彼を哲学史の流れに位置付けて研究するために必要であるだろう。

ホワイトヘッドにさらなる光が照らされるためには、われわれは科学史だけでなく、哲学史についての記述をも踏まえたうえで、彼の哲学を研究すべきである。こういった論考に関しては、様々な知見を持つ研究者の読解に期待する。

本文引用内の「」は著者

引用文献

Whitehead, A. N.: *Process and Reality*. The Free Press. 1978 (略記PR)
Whitehead, A. N.: *Science and the Modern World*. The Free Press. 1967 (略記SMW)